

3 ボランティア活動・教育

進捗状況報告

前回状況報告に対する第三者評価において「ボランティア活動の実態を把握するための基礎データ不足」についての意見が寄せられたが、その点についての状況は残念ながらあまり変わっていない。もちろん大学および学院関係で把握しうるものについて、例えばヒューマンサービスセンターの活動実態などは年次報告などで理解されるし、UNITeSの活動についても国際教育・協力センターからその全貌が報告されている。ただし、ボランティア活動が、自主性、主体性を基本とする性格のものである以上、どのような形のボランティア活動を学生が選択し、どの程度それに時間的、実質的な協力をしているのかについてのデータの把握は困難である。そのなかで関西学院大学総合教育研究室が実施するカレッジコミュニティ調査（2008年3月）において、例えば週末の余暇の時間におけるボランティア活動などに割かれる時間の割合としては全体の1.2%程度、22項目中20位と低調な結果しかでていないという数字からなら、本学学生のボランティアへの関心は低いものとなる。しかしこの調査自体のなかに、ボランティアに関する質問はこのひとつだけであり、例えば週日においてボランティア活動を自分の生活スタイルに組み込んでいる学生の有無などはこの調査からはまったく知ることができない。

ただしボランティア活動の教育的意義については改めて関心が高まり、特に07年度以後就任したグローバル院長が提唱するEducation for Lifeという教育展開のなかで、とくにService Learningの可能性が注目され、その実現のための全学院的プログラムの検討が進められている。これはこれまで学生たちの主体的な課外活動とされてきたボランティアを中心とする社会貢献活動を、正課活動としても評価し、例えばそれによって単位を認定するなど、積極的にカリキュラムのなかで位置づけてゆこうとする動きであり、そのことを通じて、よりその全体が捕捉可能なボランティア活動プログラムの展開ないし、推進が図られることが期待されており、09年度に向けてのその実現を待ちたい。

同時にもうひとつの課題として、学生によるボランティア活動の奨励にとどまらずかつて阪神淡路大震災以後10年にわたって展開されてきた、ボランティア活動についての教育プログラム（総合コースなどによる全学科目の提供）も、担当者の交代などによって中断されたままであり、やはり教育機関としてはボランティア社会の醸成、ボランティア文化の発信のための努力が改めて求められているところである。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

すでに言及したカレッジコミュニティ調査における「ボランティア活動にさかれる時間」の指標以外に、評価情報分析室の調査（2006年11月）及び教務部によるボランティア関連科目の履修者がある。前者でのボランティアへの意向は67%の高水準を維持し、後者の履修者数も伸びているので、潜在的に本学におけるボランティア活動への関心は高いとみなすことができる。しかしながら、その意欲が実際の活動にどのように結びついたかを数量的にとらえる指標は現在ないため、今後、ボランティア活動の特性からそれが困難であることを十分考慮しつつ、いかにその実態を把握することができるか工夫することとしたい。

学内第三者評価

以前からの懸案である、「本学のボランティア活動の実態を把握するための基礎データ」の作成については、ボランティア活動というものの性質上困難であることは理解できるが、ボランティア活動の今後の進展のためには不可欠であり、工夫と努力が期待される。「ボランティア活動への参加学生数の増加」についてもデータの裏付けがほしい。UNITeSボランティアへの派遣は毎年一定数が参加しており、継続的に続けられていることは評価できる。

また、ボランティア活動をService Learningと捉え、それを全学展開させることは本学の目指す人間像の養成のために必須の事項と思われるので、より充実することが望まれる。

なお、学外委員からは以下の意見があった。
ボランティア活動の実情調査などのデータ収集を早急に行い、ボランティアの輪が広がっていく体制の構築が望まれる。学生・教職員が気軽にボランティアに参加できるためには、関学がどのようなボランティア活動に関係があるかをリストアップし、学内掲示板・HP等で紹介していくことが重要である。その参加の輪がより広がっていくことにより、学生の関心も高まっていくことになるのではないか。大学としてのボランティアの積極性が出てくれば、学外にも積極的に公開し、学内にとどまらず地域へ効果が波及していくことを含めて期待したい。